

「対話」を通して互いの考えを認め合い、学び合う児童の育成

—子どもの自己肯定感を育む授業づくり・学級づくりを通して—

大阪市立新森小路小学校

1. 研究主題設定の理由

本校では昨年度までの3年間、国語を研究教科として、いわゆる主体的・対話的で深い学びを国語の授業の中でどのように位置付けるかということを意識して授業づくりを行ってきた。対話を活発にするための様々な手立てを試していく中で、対話そのものが目的となってしまう、「何のための対話なのか」という本質的なところが見えづらくなってしまった。改めて、対話はあくまで手段であり、本時のめあてや単元の目標を達成するためのものだということを認識し、対話の先にある、子どもの変容（変化や成長）を指導者側がしっかりと見取っていくことに重点を置いた授業づくりの必要性を感じた。

2. 研究の趣旨

令和5年度の大阪市小学校学力経年調査の「自分には良いところがあると思いますか」の質問に対して、肯定的に答える本校の児童の割合は約67%で、大阪市平均（70%）を下回る数値であった。内閣府の実施した調査（我が国と諸外国の若者の意識に関する調査）では、「自分自身に満足している」「自分には長所がある」「自分は役にたっている」といった自己肯定感に関する項目で、諸外国と比べ日本は最下位となっている。数値で測れる学力ももちろん大切ではあるが、長期的な視点で考えると、自己肯定感を育むことが子どもたちの学力の土台となり、豊かな人間関係の構築や明るい未来につながるはずだと考えた。

対話による子どもたちの変容（分かった！・できるようになった！・自信がついた！・役に立った！・自分やクラスの友だちの良さに気付けた！等）＝自己肯定感の向上と捉え、45分の授業づくりや単元づくりにつなげていくこととした。

以下の点を意識して、対話や協働を取り入れた授業づくりを行った。

- ① 対話の必要性やメリットが感じられる学習課題や内容の設定
- ② 対話に至る授業の流れ
- ③ 対話を深めるためのしかけ（手だて）
- ④ 対話後の流れと子どもの変容

3. 研究の概要

視点① 基礎学力の向上

- ・各学年の帯学習の取り組み（年間を通じて、つけたい力の設定）
- ・読書活動の充実

お気に入りの本を見付ける工夫・新森本の森（年間 50 冊目標）

視点② 対話や協働を取り入れた授業づくり

- ・本時の子どもの対話や協働を見取る。

授業後の振り返りや、単元前後の主観的な指標（アンケート等）を比較・分析する。

- ・自己肯定感や自己有用感・達成感（できた・わかった）が高まるような単元構成・第3次（言語活動・交流・発表・成果物等）の設定

視点③ 学級経営につながる児童理解・集団理解

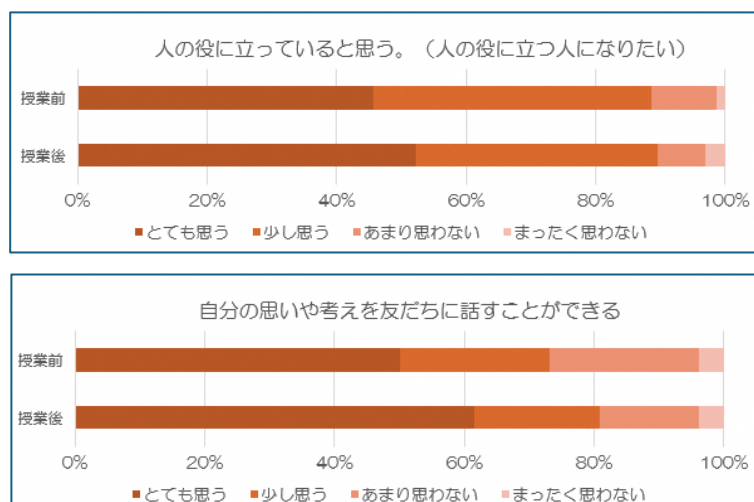
- ・日常の学校生活の中で、児童の自己肯定感を育む集団育成の取り組み
- ・hyper-QU（学級集団アセスメント）を活用した、児童理解と集団理解

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

対話による児童の変容（自己肯定感の向上）を一定、見取することはできたと考える。教科を絞らなかったことで、様々な教科・領域で研究の視点に沿った授業づくりを行っていくことができた。また、年間を通じて、児童の

自己肯定感をどのように向上させていくかの研修を行ったことで、教員の自己肯定感への理解と意識の向上が図ることができた。



(2) 今後の課題

児童の自己肯定感は、一朝一夕に向上するものではない。授業の中で育むだけでなく、日々の学校生活・学級で安心できる人間関係を構築していく必要がある。また、そのためには学校や教室の規律の徹底や、教員一人一人の指導技術の向上・教職員間での課題意識の共有が重要になってくるだろう。